

メルメ・カションに関する若干の資料

澤 護

〔一〕

1862年2月15日の上海で発行された「ノース・チャイナ・ヘラルド」(The North-China Herald) 紙に、「日本および日本人」と題する長文の記事が掲載された。この投稿者は箱館に居住したR.L.という頭文字の人物で、1861年12月7日に箱館(Hakodadi)から上海へ書き送ったものであった。

この当時の箱館に居留した欧米人の数は非常に少なく、したがってこのR.L.なる人物の割り出しは簡単なことだと高を括っていたが、いざ調査してみると該当する人物は見当たらない。そこで、この人物は箱館に居住していたのではなく、たまたまこの地を訪れた旅行者で、しかもこれまでに日本に関する関心が非常に強かった者と判断して調べ直してみると、1864年に『日本周遊旅行』(Un voyage autour du Japon)をフランスで刊行した後の駐日スイス領事のリンダウ(Rudolph Lindau, 1830-1910)が浮かび上がってきた。

リンダウは1859年に初めて日本の土を踏み、さらに1861年に再び長崎に遣ってくると、この年の10月下旬より日本周遊の旅にでた。彼の乗ったサン・ルイ号は、1861年11月初めウラジオストックを出航した後に激しい風雨に遭遇しメインマストを折り、その修理のため約5週間箱館滞在をせざるをえなくなった。1861年12月9日箱館を離れ江戸・横浜へ向かったが、この間にリンダウは間違いなくカションに会い、アイヌ伝説等を教えてもらっていたので、このR.L.をリンダウだと断定できる。

日本の諸制度を真剣にかつ真摯に学ぼうとするとき、外国人が遭遇する面倒な問題があまりにも多く、しかも多岐にわたるだけに、現状にあって日本と日本人について正確に書ける人はいないとはっきり言いたいとの書き出しでこの投書は始まる。最近刊行された日本に関する書は、信頼にたりの事柄がほとんど含まれていなく、学術的な価値はなく、正確な政府資料にもならず、単なる楽しい旅行記でしかないと痛烈な批判をした上で、これまでに出版されたエルギン、ハイネ、オリファント、モンジュ、ホークス、ケンベル、シーボルトらの書物は彼らが日本で見たものを書いたのだからその個所は信用できるだろうが、それ以上のものでなく、中身がまるでないとも切って捨てている。

確かに、これらの書で取り上げられた題材は長崎、出島、下田、横浜、江戸、箱館、浅草や富士山といった共通の場所、天皇（ミカド）、大君、大名、二本差しの役人や浪人といった人物の描写、絹、茶、漆器、象牙細工のような土産品、畳、箸、塵紙のような外国人であればだれもが珍しがらる事柄、こういったことを題材に書いている共通点がある。興味本意の旅行記ならそれでもいいが、もうすこしましな新しい日本事情を織り込んだ有益な書物をなぜ書かないのだとR.L.は強い憤りをみせている。このように書き示した後で、下記に示す興味ある話が長々と続く。

「私はメルメ・ド・カシオン神父というフランス人紳士を存じ上げている。神父は日本の琉球諸島に1年半滞在し、フランス使節グロ男爵に同行し江戸へ赴き、日仏条約が締結されたおり通訳として役割をよくはたし、現在は箱館に居住してほぼ3年ほどになる方である。この紳士はここ10年間絶え間なく日本語を学んでいられる。神父自身は未だ日本語がわからないと言っているが、彼の話したり書いたりする日本語は、育ちのよい日本人と同じくらいに正確だと、日本人ははっきり断言している。高貴な生まれで、身分が高く、見聞ある数名の日本人と神父は親しく付

き合っており、日々あらゆる階層の人々と自由に話を交し、彼らの習性を学び、質問をしては相手の返事を理解する機会が毎日のようにある。奉行たちは手厚く彼をもてなし、日本の役人から彼ほどの厚遇を受けている外国人は他にいないように想われているほどである。役人や商人たちは実に丁重に彼のことを話し、彼の弟子やその親類は彼に優る人物はいないようにあがめている。しかし、メルメ神父は日本の制度について、彼が集めてきた新しくしかも信頼できる情報を、全て私に教えるまでには非常に長い時間がかかるだろうと話してくれた。しかも、彼の意見では、この長い時間がかかることはどうしようもないことだと言う。日本の下層階級の人たちは無知で、猜疑心が強く、信頼できないと彼は言った。役人は教育はあるものの、たいていは自国の諸制度にはほとんど関心を向けない。さらに、外国人に対する古い偏見が、現在の対外関係から弱まるどころかむしろ強まっただけに、欧米人との交際には極端に用心深くなっている。日本の政治・経済状況についての情報を得たいと想う者には、なおもより大きな諸問題が控えている。

大君政府の実態はこのようなものである。本来なら各藩 (governments) が極めて信頼にたる正確な情報を把握しておく必要のある事柄を、大君政府に隠しておくほうがとりわけ大君の同僚や家臣 (18名の大大名と342名の小大名) の臣民の利益となる。例えば、日本の人口、諸大名が擁する大小多くの軍隊の兵力、各地方の富、日本のさまざまなまがりなりにも独立した領主の歳入などの真実を知ることはとうてい不可能である。諸大名は、あまりにはっきりした嘘でなければ、自分たちの都合のよいようにこれについて報告できる。大名たちが真実を語らないようにしているのには、大きないくつかの理由がある。加賀、薩摩、仙台、細川、黒田といった大大名は、実際よりも実力が低いように報告する。これは極めて疑い深い宮廷が、彼らの実力を知ったら妬みはしないかと恐れてのことである。その一方では、小大名は財力が乏しく

実力が伴わなくとも、江戸での権勢を守るため、富と力があるようにみせかけたがる。メルメ神父は、日本人はおおむね嘘つきだとまではあえてほめかさなかつたものの、それでも日本のたいていの人は真実を隠そうと異常なほど注意を払っているようだと言わないではいられなかつた。この結果であり、同時にこの証明でもあるのだが、日本で口の軽い人間といえは卑しくまるで教養のない者でしかなく、いわば伝染病患者のようにだれからも除け者にされている罪人である。この嘆かわしく不可思議な事態は、日本を支配する政治制度の当然な帰結である。この権力支配は確かに封建時代のヨーロッパほどの残酷さはないが、それでも下層階級は己のおえら方たちの正義を期待せず、むしろ権力を恐れている。

外国人がこのことを知ったあとで、政治・経済の分野で価値ある情報を集めるのをあきらめ、日本の宗教、歴史、習慣、慣例の研究に専念するようなら、他の同じような大きな困難に直面する。日本人は無知である——これはだれも否定できない——、そして日本の書物(?)は無知な国民の書である。日本人の知的能力は概して買いかぶられてきたのである。

大名は、昔のがさつな西欧の地方豪族や都市の支配者よりも、はるかに開けているとざっくばらんにみなされているが、西欧中世の大学者、つまりトマス・アクィナスやアルベルトゥス・マグヌスのような哲学者が今ある日本から出現すると分別ある人でまじめに信じている人がいるだろうか。コサックたちの中からもうひとりのニュートンを見つけることに期待をかけた方がよさそうだ。

日本に偉大な哲学的知性が生まれてこない理由は容易に理解されるところだ。この国にはヨーロッパにある古典時代がない。不滅の永遠に若いローマとギリシャの遺産の代わりに、古びた中国の道德律しかこの国にはない。キリスト教と古代文明の高みから受け継いだ哲学、詩歌、芸

術の無尽蔵たる源泉は、西欧世界を再生させさらに育ぐくんだが、日本思想の不毛の大地を活性化することは決してなかった。

アルベルトゥス・マグヌスが大勢の弟子たちを収容する大きな建物がなかったため、やむをえずパリの街中で教えなければならなかったのに対し、わが中世が哲学と呼んだものを言い表す言葉さえ日本人は持っていないのだ。

日本の上級・下級学校では、たいがいの授業時間は難しくて数多い日本と中国の文字を暗記させることに費やされるのが通例である。何年も無味乾燥でばかげた学習を続けたあと、生徒には中国の古典を読むように仕向けられる。確かに中国の古典は秀れた道德律を有しているが、論理学、心理学、神学といった人間の心を高める純粋な沈思熟考的な学問はここでは完全に無視されている。日本人は膨大な数の楷書、行書、草書体を覚えることで大学者の名声を勝ち得られる。貧しい人であっても平仮名が読め、片仮名という表音文字が書けると、十分に教育を受けたことになる。しかしながら、学者であろうと貧者であろうと、知性を養う“手段”(means)としてがむしゃらに学んで、知性が養われたためしはない。この教育制度の結果が、日本文学の痛ましいまでの底の浅さである。造詣の深い書物があるにせよ、それらはまずもって中国文学からの借り物である。真の日本の書物を最初から最後まで読み通すことは実に苦しく、かつ報われない仕事である。日本の立派な歴史書、つまり日本の宗教制度、政治体制、経済状態、日本人の礼儀、風俗習慣について外国人に興味深く頼りになる情報を与えてくれそうな書物は未だ書かれていない。

日本に関する情報をなんとしてでも手に入れたいと想う外国人は、子供じみた文学しか持たない無知で疑い深い国民を目のあたりにすることになる。それ故、自分の経験から学ぶこと以外にほとんどなにも学べない。したがって、日本に関する役に立ちしかも有益な本を書くため本の

材料を集めようとするなら、なん年もの歳月をかけ、十分に時間を費やすことが必要である。そうしてこそ、ケンペルやシーボルトからの引用とか剽窃であると言われたいですむというものである。

私の記憶する限り、これは日本の諸制度を研究する難しさについて、メルメ師となん回かにわたって話を交わした要点である。

貴紙ならびに貴紙の読者の皆さんにこれらの意味をお伝えし、心からの敬意の念を表わします。

敬 具

R. L.

箱館、1861年12月7日¹⁾」

この投稿の中にでてくるカシヨンの動向や彼に関する記述が、はたして正確なものであったかをまず探っておこう。カシオンを含む三人のフランス人神父が琉球に送られたのは1855年初めのことで、彼らは香港から冬場の荒海を乗り越え約2週間かけて沖縄を目指し、那覇に投錨したのは1855年2月26日のことであった。上陸を拒否され、とまどう役人たちを後目になんとか那覇の地におり、「天久の寺」(聖現寺)に収容されたのは翌3月2日であった。しかし、フランス人神父たちは厳しい監視のもとで、新しい信者をひとりとしてみつけることはできなかったものの、日本語の習得についてはかなりの成果を上げていた。とりわけ、カシオンは日本語ばかりでなく琉球の方言にも急速の進歩をとげていたが、この地の気候と過労とにより1856年10月下旬に香港に戻るようになった。これには、後日フランスと日本との間で交渉が始まった場合、通訳になり得るのはカシオン以上の者がいなかったから、香港で体力回復をはかりここで待機する必要があるとの判断もあった。先のR.L.の投稿にある「琉球諸島に1年半滞在」の記述は、カシオンが語ったものであろうがこれは正しい。

予想した以上に長く香港に滞在したカシオンは、1858年6月上海に行くようにいわれ、ここでグロ男爵(Baron Gros)と会った。グロ男爵はカシ

カシオンを引見し、日仏条約の通訳を努めるほど語学に自信があるのかと問ねると、カシオンは「日本語は相当楽に話せます。本はすらすら読めます」と答えている。1858年10月9日（安政5.9.3）江戸に於て日仏修好通商条約が締結された折の通訳となったカシオンは、この条約を日英条約の丸写しだと醒めた目で批判している。

条約締結後、使節団は10月下旬に上海に戻り、カシオンはさらに香港へ向かった。病気がちのカシオンは彼の健康に適する箱館か長崎のいずれかの土地に出発する合図を香港で待ち、1859年8月10日になって揚子江河口の呉淞に着いた。しばらく箱館行きの船を探したがなかなかそれがみつからず、やっとロシアの哨戒艇に便乗でき箱館に到着したのは11月25日のことであった。したがって、新聞記事にあるカシオンの箱館居住はほぼ3年ではなく、2年強とこの点は訂正が必要である。

箱館到着後の数日間だけカシオンはフランス領事も兼ねていたイギリス領事ボジソン（C. P. Hodgson）の住む称名寺に仮寓したが、彼はこの町の奉行や役人らと直接に交渉し、町の中央にある大きな寺の広い庭の中に自分の住居を立て、箱館滞在中この土地を借り受けることに成功した。カシオン到着後、わずか1週間後のことである。初め箱館に住むことを妨害した役人らを巧みにまるめこみ、カシオン以前にあってはだれ一人として6か月以上の地所の借用ができなかったことをみると、彼の達者な日本語がここで大いにものをいったことになり、先の新聞記事の正鵠さを裏付けている。

1859年12月3日付け書翰によると、もう自分の住いで英語とフランス語を教えており、翌1860年1月5日の手紙では提供を受けた地所に礼拝堂を建て終っている。

「私は役人たちから招待を受け、私も彼らを招きました。私のつつましい礼拝堂をこの人たちにみせ、この礼拝堂をあなたたちと日本人全ての

ために建てたと話してやりました……。私の勉強のために、あらゆる援助とあらゆる補助が与えられました。私は全ての人に知られ、それらの人たちは丁重に私に挨拶をします。実に多くの日本人が、私に会いにくるのに口実をみつけようと工夫をしています。私が病人の治療をしてあげますと、その病人は私にどう感謝の気持ちを表してよいものやかわからないのです。この人たちから魚、米、砂糖などをもらいます。この小さな礼拝堂には、ロシア人やアメリカとイギリスのカトリック信者がたびたびやってきます。外国人の居留者は、私と役人の仲がよいのを見て、私に会いにやってきます。フランス語の学校を開きました。今までに、僧侶と小ぜりあい²⁾をしただけです。」

この手紙を書いた後の1860年4月の書簡によれば、フランス語学校にはかなりの数の上流家庭の日本人の若者が勉学にきており、カシヨンの遠大な望みであったフランス語教育がかなり普及していったことがわかる。このフランス語学校の急速な成功に勇気づけられたカシヨンは、彼の知識を信頼し、まるで本当の医師であるかのように病気の相談にくる地元の人たちのために、病院の建設を計画するようになった。

箱館でのカシヨンの病院建設計画を知った箱館奉行・竹内下野守は、万延元年（1860）9月5日にカシヨンに書簡を送り、この中で万事を彼に任せると賛意を表したが、結局この計画はロシア正教司祭団が巨額な資金を投入し、この地に病院を先に建築したため中断することになった。しかしながら、箱館奉行と昼食を共にしたり、栗本鋤雲（安芸守）と親しく懇談している事実から、奉行たちがカシヨンを手厚くもてなしていると書いたR.L.の記述もこれまた正しい。

1861年の段階で、カシヨンまたはR.L.がどこから「18名の大大名と342名の小大名³⁾」の知識を得たのか不明だが、1863年5月に横浜で発行された英字紙を翻訳した記事があり、そこには諸侯の兵力が記録されている。時

代的には若干のずれがあるが、カシオンが有していた知識とそう大きく変わらなかったであろう。

「○此下ニ記セルハ日本政府ニ背キ 皇帝ノ政ヲ扶助セント欲スル所ノ諸侯也

島津修理大夫	薩州侯	兵員七万七千八百人
細川越中守	肥後侯	同 五万四千人
黒田美濃守	筑前侯	同 五万二千人
毛利大膳大夫	長州萩侯	同 三万六千人
鍋島肥前守	肥前侯	同 三万五千人
藤堂和泉守	伊勢津侯	同 同
蜂須賀阿波守	阿波侯	同 同
水戸		同 同

惣計三十五萬九千八百員

猶比外右ノ當数多アリト云

一 仙臺ハ大邦ニシテ其中ニ廿三諸侯アリト云

一 加賀ハ富國ニシテ其税金 大君ニ次クト云

此疑ラクハ吾等カ聞ク如キニハアラサルベシ 此侯モ亦日本 皇帝ニ敬服セリト云⁴⁾

カシオンが箱館で借り受けた土地に自分の家と礼拝堂を建てた直後の1860年初頭には、日本語を話せる外国人がいるということで、役人、商人、大工ばかりでなく、毎週カシオンを攻撃する説教をやる僧侶さえ喜んで彼の家に話しにやってきた。しかし、この時点ではまだ日本人をカトリックに改宗させようとの神父としての使命感を示すことはなく、柔和な学者との評判のもとで多くの交際を楽しんでいた。

だからといって、カシオンが役人たちから見張られなかったわけでもなく、

また箱館が神奈川より外国人にとって安全だったわけでもなかった。神奈川での殺害事件のようなことは箱館でもたびたび起こっていたし、カシオン自身も殺されるかもしれない危険に脅かされていることを1860年4月の書簡で書いている。これは、万延元年（1860）3月の井伊大老の暗殺事件を知った上での文章である。

「私たちはここで毎日惨殺される危険に遇っています。神奈川での殺害事件のようなことはしょっちゅうあることで、ほとんどこんなことには慣れっこになりました。ドルのためにもうひとりならずの殉教者を生みました。役人たちはいつも16世紀の自尊心の強い日本人そのものです。彼らは信じられないほど簡単に人を殺し、殺し合ったりするのです。最近、ここ箱館でもそのようなことがありました。ある外国人がたまたま両刀を差した日本人の役人とぶつかりましたところ、この役人は彼を殺そうとしました。ところがやり損ねてしまいましたので、彼はその場で少しも動ずることなく平然と喉を突いた⁵⁾のでした」

このような状況にあって、カシオン自身が暴漢に襲われたこともあった。1861年3月2日付けの書簡で彼は書いている。

「この地ですでに二度私の命が狙われたことを御存じでしょうか。最近のことですが、私の良馬が卑劣な暴漢の腹の上を乗りこえあばれたおかげで命拾いをしました。私は重病の私の友人である日本人役人を見舞いに、他の地ではまずないような恐ろしい夜の中を出かけたのです。雪というより氷塊が私と私の馬の目を塞いでいました。その時、突然ひとりのろくでなしが馬の手綱をつかみ、刀で刺し殺そうとしました。驚いた馬は傷を受けながらもこの男の上を飛び越え、私はことなきを得ました⁶⁾」

このようなカシオンに対する暗殺、陰謀はその後も続き、同じ年の8月20日の書簡ではこうも綴っている。

「私の命を狙うたくらみは相変わらずです。奉行所は調査をしましたが、あえて嚴重に取締ることはしませんでした。この陰謀を企てているのは仏僧たちのようで、彼らは私との議論に勝てなかったので、けりをつけようとしているのです。そんなことは意に介しません。そうはいつでも用心はしています。召使たちと二人の弟子は私と同居し武装しています。昨日の真夜中に家の窓ガラスが全部粉みじんに飛び散りました。私はまだ床に就いていませんでした。本当に驚きました。日本人の気持ちが沸き立っているのは確かです。あらゆる嫌悪感が次第次第に露になっているのです」

カシオンと一緒に暮らした二人の弟子とは、1862年に竹内下野守の遣欧使節の通訳として加わった立広作（1845－1879）、長じて北京駐在特命全権公使となった塩田三郎（1840－1889）だったらしい。カシオンはこの二人のうち一人について、「私には大変几帳面な22歳になる気品のある若者がいて、宗教を含めあらゆる学問についての弟子がおります。彼は日本語についての私の秘書なのです。よくフランス語を話しますし、さらに一層上手になることでしょう」⁸¹と書いている。この若者は間違いなく塩田三郎で、彼は横浜フランス語学所の助教としてレオン・ロッシュ公使に強く望まれたほど語学に優れており、通訳として渡欧もし、さらに横須賀製鉄所建設にあたって数々の交渉の場で活躍もした。また、イタリア、ベルギー、ロシアなどの国から上位の勲章を受けてもいるだけに、非常に優秀な人物であったことが看破できる。

カシオンが自ら語った中にはでてこないが、彼を狙った殺傷事件が1862

年12月にあり、これが横浜の英字新聞に小さく掲載された。⁹⁾この記事によると、詳細は不明であるがカシオンが1862年12月初めのある日馬車で出かけている途中、雇い入れてまだ間もない別当か馬丁かが斧の背か太い丸太かを使ってカシオンの頭を殴打し殺害を図った。カシオンは身を守るものを手にするため急ぎ家に駆け込んだところ、暴漢もすぐ彼の後を追いかけてきた。丁度その時運よく家の中に二本差しのカシオン掛けの日本人医者がいて凄んだところ、暴漢は大声で殺してやると喚きたて家からでていったため難を逃れた。この件は荒くれ男の単独犯なのか他に深い原因があるのかはわからないが、カシオンは一部上流の日本人に憎む可き人物となってきただけに、どうやら深い意味がありそうだと報じている。

日本国内では攘夷の嵐が吹き荒れ、生麦事件など外国人が襲撃される事件が続発してくると、カシオンとしても自分の身を守らなければならず箱館を一時的に離れる決心をするようになった。これには、先の新聞記事にあるようにカシオンの存在を邪魔扱いする人たちもでてきたこと、健康問題がいつも付きまとっていた彼にとって厳寒期には零下20度以下にもなる天候、病院建設の頓挫などの理由もあったことだろう。

カシオンがいつ箱館を去ったのか適切な資料はないが、それは1863年春頃でその後は江戸のフランス公使館に居住したものと推察される。1863年7月10日に日本に戻ってきたジラル神父は、ムニク、プチジャンの両神父が健康であることを知り喜んだが、突然「家庭の事情」(des affaires de famille) という口実でフランスへ帰るカシオンを引き止めることができなかつたと書いているので、1863年7月頃に日本を離れたと判断される。この傍証としてカシオンがパリで刊行したアイヌに関する著書があり、¹⁰⁾そこに「パリ、1863年10月29日」の日付が印刷されているのをみると、1863年7月頃の横浜出港はまず妥当だといってよいだろう。

カシオンのフランス滞在は短期間だったものとみえ、1864年2月には香港に戻って来ていた。1864年2月6日横浜鎖港使節・池田筑後守一行の随

員として渡仏した杉浦譲は2月25日（文久4.1.18）の日記で次のように書き留めている。

「朝、仏国カシユン〔以前函館ニ在留せし同國教師〕本船へ尋問し暫時面話あり。（一部略）此夜、カシユン仏之コンシュルセネラルを誘引して訊問に來り。カシユンハ引残りて國事を議す¹¹⁾」（句読点は筆者）。

カシオンが池田筑後守一行の乗ったフランス郵船・イダスプ号を訪ねてきたことを、やはり一行の随員であった岩松太郎も彼の航海日記に記録しており、「鹽田三郎殿の佛語の師他」と書き留めている。カシオンの愛弟子であった塩田三郎が一行に加わっていることを知って訪ねてきたものか、フランスへ向かう34名の日本人が乗船しているとの話を聞いてカシオンが訪問したのかは確かめようがない。

おそらく、この直後にカシオンは日本を目指したものとみなされる。1864年4月27日に第二代駐日フランス公使として来日したレオン・ロッシュは、カシオンを公使館付き日本語通訳官として採用しているからである。1864年3月2日に横浜入港をした英艦アルガス（Argus）にオールコックらと共に乗船していた人物に「ひとりのローマン・カトリック神父¹²⁾」がいた。この神父をカシオンと判断すれば都合がよいのだが、香港→上海→横浜の航路であれば、この年2月29日があったとはいえ少し早過ぎるとしないわけにはいかない。また、アルガス艦の航跡を追いかけてみると、この艦は上海より長崎へ寄港しているので、1864年2月25日に香港にいたカシオンが、これに乗船したと判断するには無理があるとみなさなければならぬ。とすれば、当時の船便の乗客名簿などから割りだせないものの、次の証言に信頼するしかない。

「一方、メルメは日本から離脱したため外国宣教会から除名される立場

に追い込まれたが、パリ神学校の助言により（1864年）4月に戻ってきた。しかし彼はフランス公使館に雇い入れられ、実際のところ教会の仕事はなにひとつしなかつた¹³⁾」

〔二〕

カシオンは後に西郷隆盛から「奸物」と決めつけられ警戒すべき人物とされ、また勝海舟には「妖僧」として批判されるようになるが、これは1864年4月から彼が帰国することになる1866年10月までの言動に大きな問題があったことになる。この2年半の間にフランス公使館付き通訳の肩書きとは別に、フランス公使ロッシュの強力な後ろ盾があって、相当にあくどい幕府への武器の売り込み、横須賀製鉄所にかからんで、金銭上の法外な利益などの搾取といった指弾されるべき悪商人の顔をも持っていたようである。

パリ外国宣教会を離れた後のカシオンのもうひとつの顔は、特に1866年6月から8月にかけて数多く描かれたワーグマンの『ジャパン・パンチ』の中にある風刺画を分析することで、彼と幕府との付き合いや問題ある言動が一層鮮明になってくるのは間違いがないところである。

「ひとかまへ別れ世界やさくら花」

これは1865年11月頃に、カシオンが横浜の遊郭「青樓」で作った発句だという。出典は「日本新聞」13号（慶応元年10年14日＝1865年12月1日）に書かれた朱書の文字である。¹⁴⁾「朱書」とはなんであるのか気にかかり、「日本新聞」のこの号の原紙を調べてみたが、筆者の調査したものには、この「朱書」の文字はなかった。問題になるこの個所を先に書きだしておこう。

「今迄外国人の仕方ハ、大君をして実に國君名号を存さしめ、且実権を握らしめんとせり。乍去遂に成功期なし。大君の威権ハ影にして其名号ハ虚なり。其一二を挙て言ハ、己前リチャルソン（筆者注：生麦事件で殺害された英人 Richardon）殺戮を被るの時、現に犯人在りなから之を裁判所に呼出すの権なし。理非を問ハす償金を取られた里。現在の事を言ハ、五ヶ月己前より大師を率ゐて進發しなから謀叛人の長州を征するの力なし。日本の政事者ハ皆支那を以て規矩と為す。故に大事に監ミ事を誤る事多し。乍去日本役人中にハ人品賤からず、勇敢にして少年の意気を存する者往々あり。今之時に當り、若し太閤秀吉の如き英雄ありて、將軍之職に在り、其先祖の如き智勇を兼備し、三港の開けたる後好機會を見失ハさるの見ありて、厚く外國と交りたくハ、莫大の人命を損せず、或ハ夥多の金銀等を費さず、日ならずして皇帝の掣時を免れ自ら獨立の國君たらん事手を反すり如くならん。大坂に於て通商始りなハ、横濱の交易衰へなん哉。否、是後日詳話すへし（句読点は筆者）。

十月廿一日譯成

鈴木唯一譯

柳河春三閱¹⁵⁾

これが筆者の確認した「日本新聞」第13号にある記事であるが、この号には他の原紙も存在しているらしく、『幕末明治新聞全集』（第1巻）には先の記事に続いて次の「朱書」の個所が活字にされている。

「（朱書）右佛人の建白は「カシオン」^{佛人の名}と云者の文章也、此者發句迄も習ひ横濱青樓にて

ひとかまへ別れ世界やさくら花¹⁶⁾」

筆者の確認した「日本新聞」第13号と『幕末明治新聞全集』（第1巻）に掲載された「日本新聞」第13号とは、漢字や送り仮名などにかかなりの違

いが認められるが、これは元の新聞を浄書したり写筆した際に生じたのであろう。したがって、「(朱書) 右佛人の建白」云々の条は、校閲した柳河春三とか、この新聞を所有していた者がメモ代りに後に書き加えたものとみなされる。

鈴木唯一が訳した記事は、1865年12月1日の横浜で発行された英字紙「ジャパン・タイムズ」(No. 13)に掲載された長文の論説の部分訳であり、また原文にあまりとらわれない自由訳だが、この論説のどこをみてもカシヨンの発句などはなく、明らかに後に書き足されたものであることがわかる。ただ、大君の弱体ぶりを語ったこの論説は、ところどころにフランス語が使われたり、フランスの政体が述べられていて、カシヨンの考え方を表してもいるだけに「カシヨンの建白」との見方は可能である。

「十月廿一日譯成」の日付は慶応元年10月21日のことで、西暦でいえば1865年12月8日になるから、鈴木唯一は英字紙が発刊されて1週間後にこの部分訳を終えたことになる。

先のカシヨンの発句が本当に彼が作ったものかどうか確認はできないが、時には横浜吉原で遊郭遊びをしたらしく、彼にはお梶という女(らしゃめん、洋妾)がいたらしい。

「お梶は、江戸駒込、光源寺大観音堂の、堂守の娘であって、カシヨンの、らしゃとなってから、佛語を習ひ練達し、栗本鋤雲のごときは、お梶を通辯とし、佛人と話したことさへあった。彼女は栗本に、異人の内地雑居及、日本女の自由結婚を論じたほどであるから、現代のモダンガールなど、決して新しきを誇ることは出来ない。女の新しい思想の歴史では、お梶は、第一ページを占むべきであろう、彼女は、慶應二年病死してしま¹⁷⁾った」

この『幕末開港綿羊娘情史』を書いた中里機庵(右吉郎)の調べがつか

なく、また内容にどの程度の信頼をおけるのか問題もあるが、少なくとも子爵渋澤栄一が序文を書き、次のような記述を読めば頭からでたらめだといいきれないところがある。

「当時、佛國から派遣された横濱に滞在中のカトリック教僧上、メルモツチと云ふのは表面上、僧とは云へ、實は怪傑であった。ナポレオン三世帝の使命を帶び日本に來たとも傳へられて居た。公使のベルクール、總領事フォン、ロセス（事實ロセスが公使權を握つてゐた）も、メルモツチを政治的に尊重していた。メル僧上は、佛国士官の殺された一件（筆者注 フランス陸軍少尉カミュが1863年に惨殺された井土ヶ谷事件）によって、幕府との同盟進行の停頓する事は宜くないから、幕府で佛國の面目が立つやうな處置をとり、同盟の方は積極的に進むべきであると、公使、總領事に忠告した。フォン、ロセスは、僧上の忠告により幕府と交渉を開始したのであった。其結果、幕府は士官二名の遺族に對し見舞¹⁸⁾金を支出することになった」

中里機庵のこの書によると、公使ロッシュにはおとみ、横須賀製鉄所首長ヴェルニーにはお淺、幕末に暗躍したモンブランにはお政といった洋妾がいたという。

〔三〕

「萬國新聞紙」は、横浜居留地でなにかと話題の多かつたイギリス領事館付き英国聖公会牧師ベイリー（B. Bailey）が横浜で発行した邦字新聞で、その初集は慶応3年（1867）正月中旬であつた。邦字新聞として最も早い刊行になるこの新聞の第五集（慶応3年6月中旬）に、次のような記事が掲載された。

「佛人「カシヨン」なるもの、「パリス」に行きたまひし日本大君の尊弟に隨従し、日本語通辯役を勤め居れり。「カシヨン」其懇切の容子なれとも、彼ハ日本にて得たる多くの恩澤を忘却せり。夫れハ日本政府の事に付て甚た笑ふへき箇條を佛國新聞紙中に記載せり。「カシヨン」なるものハ世人の能く知りたる如く、日本に在りし時ハ日本政府に拘りたる「ジャッパンヘラルド」といへる新聞紙の頭取なりし。其時ハ將軍ハ日本の實の國君なりと記載せしが、方今にてハ反對したる事を言ひ出せるのみならず、尚頑固にして愚なることを言へり。各々の大名ハ大將にして、大將ハ大君即ち將軍なりと。期く佞奸變説の人を此の如き高位なる日本大君の尊弟の側に侍らしむるハ解せざる処なり。「カシヨン」の言ひし事を盡く書き記しなば、尚極めて愚なることあれとも、看者の煩はしきを厭ひ是れを略す¹⁹⁾」(句読点は筆者)。

「日本大君の尊弟」である徳川昭武が、パリ万国博覧会に参列するため横浜港を發つたのは1867年2月15日のことで、カシヨンの方は4カ月早い1866年10月17日にすでに出發していたので、先の記事にある「隨従」は必ずしも適切でない。ただ、徳川昭武とナポレオン三世との引見の席では、カシヨンは自分が通訳をすることになるのは当然と考えていたから、昭武一行とはたえず接触があった。

カシヨンの通訳に関しては、向山隼人守がこれを強く反対し騒動を引き起こすことになったが、結局、昭武の言葉をカシヨンの教え子であった保科俊太郎が通訳し、カシヨンはナポレオン三世のそれを日本語にすることで解決をみた。当時のフランス語紙に、「1867年4月28日、テュイルリー宮殿でナポレオン皇帝・皇后は徳川昭武に必見、その際に日本人2名通訳、皇帝の公式日本語通訳カシヨン神父、レオン・デュリー (Léon Dury)、総領事の資格でF. エラル (Flury Hérard) が謁見式に参列²⁰⁾」との記事がみられる。「萬國新聞紙」のいうカシヨンの「日本政府の事に付て甚た笑ふ

へき」記事がどの新聞に掲載されたのか未だ調べがつかないが、通訳問題でカシオンははなはだおもしろくない立場におかれただけに、日本を誹謗する発言があったとしてもおかしくない。

しかしながら、カシオンが「ジャッパンヘラルドといへる新聞紙の頭取なりし」の一文は、どうも怪しいと判断しないわけにはいかない。「ジャッパン・ヘラルド」(The Japan Herald) 紙は1861年11月23日に発行された横浜で最も古い英字紙で、この新聞はイギリス人ハンサード (Albert W. Hansard) の手で刊行されたもので、どう調査してもカシオンがこの新聞にかかわったとする事蹟はでてこない。

「萬國新聞紙」のこの記事はかなりカシオンを中傷するものではあるが、彼は多くの幕府役人から慕われ、帰国を見合わせて欲しいと懇願されてもいたのは事実であった。

〔四〕

「佛人メルメットデカシオン氏云、カラフトの地ハ魯の朶頤する久し、日本今日の力能く之を永久に保し得可きやを知らず。然里と雖も日本政府膽を壯にし、決して之を擧て魯に附するの語を出す可からず。然らんにハ、魯強て之を取とも曲直の在る有里て、百年の後日本兵力盛に軍艦多きの日に至て、再び之を復す可きの詞ありと。和春（筆者注 カシオンの和名）は奸曲の徒にして、衆の共に憎む所なれとも、其人を悪て其言を廢せざるは我々の獨里する所なり²¹」（句読点は筆者）。

「郵便報知新聞」（明治7年12月22日）の投書欄に「日本政府ハ無慈無愛と見做す可き説」と題するかなり長文の記事が掲載され、その中に上で示したカシオンの言葉が示されている。この当時、日本国内にあっては樺太の領土問題が大きな関心事で、政府は榎本武揚を特命全権公使として口

シアに駐留させたが、世論は樺太を鬻斗を付けてロシアに割愛したとか、170万円の金額で譲渡したとの噂でもちきりであった。このような最中で掲載されたこの投書は、日本政府にロシアにゆだねられたままの樺太とそこに住む同胞がどうなってもいいのか、なぜ政府には慈悲心がないのかを問うものであった。

先に示したカシヨンの言葉の意味は、ロシアは長きに渡って樺太を自国の領土として所有したがってきたが、日本はこの地をロシアに引き渡すべきではない。現在ロシアが不当にここを所有していようとも、将来これについて日本は当然の権利として自分のものと主張できるとしたものであった。カシオンは狡猾な男であって、だれしものが彼を嫌っていたが、この件に関する彼の見方は正論であると投書者は語っている。

カシオンがいつこのような発言をしたのか不明であるが、1874年であると仮定すれば、従来言われてきた1871年頃の死亡説は怪しくなる。ただし、この郵便報知の記事を翻訳して掲載した横浜刊行の英字紙では、²²⁾カシオンの名前の後に疑問符を付け「The French missionary, Cachon (?)」としてある。カシオンは箱館に在留中にアイヌ部落を訪ね、さらにアイヌに関する書を著しているほどであったから、樺太についても彼の関心を魅いていたのは間違いのないところだが、「樺太は日本のもの」との考えとその発言は1860年代のものだったのかも知れない。

カシオンの死亡年に関しては、パリ外国宣教会の記録などから「1871年頃ニースで死去」とか「1869年か1870年に死亡」と伝えられている。これを否定する根拠はなにも持ち合わせていなく、またカシオンの足取りを追跡してみても、箱館以来たえず親交のあった栗本鋤雲（安芸守）のパリでの送別会に出席した1868年5月16日を最後に、彼の消息は完全に途絶えてしまうのである。この意味からも、カシオン氏云くとの「郵便報知新聞」の1874年12月の記事は気にかけておきたくもなる。「郵便報知新聞」の当時の編集者で、しかも主筆であったのが栗本鋤雲であっただけに、彼がこ

の記事を書いたのかもしれないが、栗本の著書でカシオンの死について触れているものはない。

本稿は欧字・邦字新聞の中にあつたカシオン関係の記事を中心に紹介したものであるが、これらはこれまでほとんど記録されることもなく、見逃がされてきたものである。1860年代におけるカシオンの考え方の一端を知る上で、これらの記事を埋もれたままにしておくわけにはいかないとの判断から書き留めることにした。

- 注 1) “The North-China Herald”, 1862. 2 .15.
- 2) F. Marnas, “La Religion de Jésus (IASO JA-KYŌ) Ressuscitée au Japon dans la seconde moitié du XIX^e siècle”, Tome I. pp.351 - 352.
- 3) 1862年7月19日付け「ノース・チャイナ・ヘラルド」紙の記事中に、1862年2月15日の一部記事をそのまま掲載した個所があるが、7月19日号では「8名の大大名と342名の小大名」としてある。
- 4) 「鈴木大雑集」(第十八集)に含まれている「横浜新聞」翻訳の文久3年3月26日のもの。「横浜新聞」は横浜で1863年5月13日から発行された“The Japan Commercial News”紙を邦訳していったものだが、英字紙の方は極く一部を除いて現存しなく、この記事が掲載された第1号は未発見。
- 5) F. Marnas, “La Religion de Jésus”, Tome I. p.382.
- 6) Ibid. p.387.
- 7) Ibid. p.388.
- 8) Ibid. p.388.
- 9) “The Japan Herald”, 1863. 1 .17.
- 10) Mermet de Cachon, “Les Aïnos, origine, langue, mœurs, religion”.
- 11) 杉浦讓「奉使日記」。これは昭和53年に刊行された『杉浦讓全集』の第1巻に収録されている。
- 12) “The Daily Japan Herald”, 1864. 3 . 3 に、“one Roman Catholic Priest”とある。
- 13) F. Marnas, “La Religion de Jésus”, Tome I. p.476.
- 14) 『幕末明治新聞全集』第一巻 367頁。
- 15) 「日本新聞」第十三号。慶應元年十月十四日。
- 16) 注14) に同じ。
- 17) 中里機庵『幕末開港綿羊娘情史』428頁。
- 18) 同上。376頁。
- 19) 「萬國新聞紙」第五集。慶応三年六月中旬。
- 20) “Le Moniteur Universel”, 1867. 4 .29.
- 21) 「郵便報知新聞」第541号。明治7年12月22日。
- 22) “The Japan Daily Herald”, 1875. 1 . 4 .